

学生・教職員と共に創る学習支援の場としての図書館 —徳島大学附属図書館と学びサポート企画部との協働事例—

Developing the role of the library in supporting students' learning with
students and faculty:

A case study of cooperating between Tokushima University Library and
"Manabi Learning Support Division"

佐々木 奈三江¹, 亀岡 由佳²

Namie SASAKI¹, Yuka KAMEOKA²

抄録：本稿では、ラーニング・コモンズにおける人的支援の一形態として、徳島大学附属図書館が実践している学生協働による学習支援について報告する。学生が運営する学習相談や学習関連イベントは教員の協力が得られやすく、また、学生同士の繋がりにより、図書館単独で実施するよりも活用されやすいメリットをもつ。一方で、図書館職員の関わり方や評価方法等、実施にあたっての課題も多い。大学教育の変革の中で、大学図書館が学習支援の一部を担う組織としてどのような役割を果たすべきなのか、大学図書館と関連組織が連携の上検討していく必要がある。

キーワード：ラーニング・コモンズ, 学生協働, 学習支援, 学習相談

1. はじめに

平成29年度の学術情報基盤実態調査¹⁾によれば、アクティブ・ラーニング・スペースの設置率は65.4%（国立大学に限れば93%）となっており、アクティブ・ラーニング・スペースの代表的な存在であるラーニング・コモンズは、着実に定着した感がある。

しかしながら、ラーニング・コモンズの必須条件として挙げられている人的支援²⁾については、施設面に比べて充足しているとは言い難い。同調査の「アクティブ・ラーニング・スペースで提供しているサービス」の結果をしてみると、「分野別学習相談」を行っているのはアクティブ・ラーニング・スペースを設置している680館（分館等を含む）のうち160館（23.5%）にとどまっている。

徳島大学附属図書館（以下当館と記載）では、ラーニング・コモンズでの支援を充実したものとするため、学生協働による人的支援を展開している。特筆すべきは、このサービスが当館独自に設置した団体ではなく、大学の公認サークルとの協働によって運営されていることである。

本稿では、当館の学生協働による人的支援について、実施に至った経緯と現状を報告すると共に、学生協働ならではの効果、課題について述べる。

2. 徳島大学附属図書館のラーニング・コモンズ

2.1 施設

当館は徳島大学附属図書館本館（以下本館と記載）、蔵本分館の2館で構成されている。本館は、新入生の授業を担当する教養教育院をはじめ、総合科学部、理工学部、生物資源産業学部等を擁する常三島キャンパスに、蔵本分館は、医学部、歯学部、薬学部等を擁する蔵本キャンパスにある。それぞれの館にラーニング・コモンズを設置しているが、学生協働による人的支援を実施しているのは本館のみである。したがって、本稿では本館の事例のみを取り扱う。

本館は、2008年度に耐震改修を行ない、2009年5月から一部開館、6月29日に全面リニューアルオープンした。当初の改修計画では、利用者のニーズに合わせたゾーニング等をテーマとして設計していたが、検討を重ねるうちに「ラーニング・コモンズ」がテーマとなり、キーコンセプトとして「ラーニング・コモンズ（従来型の図書館の役割を方向転換し、様々な付加価値をつけ、学生にとってより身近で快適な利用しやすい学習空間）の提供」を掲げることとなった。ただし、その段階ではすでに建物全体の設計が終わっていたため、「ラーニング・コモンズ」そのものを設置することはできず、完成後、どのようにして「ラーニング・コモンズ」として機能させ

るかが検討事項として残った。そこで、2009年、当館に「ラーニング・コモンズ検討WG」を設置し、ラーニング・コモンズに必要な要件は何か、改めて検討・確認した。検討にあたっては、米澤³⁾が挙げる「ラーニング・コモンズに必要な構成要素」を参照した。構成要素は「施設・設備と資料」、「サービス」に分けて示され、さらにそれぞれの中で①学習、②教育、③生活の場面に分けて例示されている。「施設・設備と資料」については、①学習の場として、共同学習スペース（グループ学習室）、PC、プレゼンスペース等、②教育の場として、PC教室、オープンスペース、プレゼンスペース、図書館資料、③生活の場として、カフェ、食堂、自動販売機、軽雑誌、軽読書用の資料、映像資料等が挙げられている。また、「サービス」については、①学習活動支援として、レファレンス、学習アドバイス、ライティング支援、②教育活動として、授業、講習会、IT支援、各種イベント、③生活に関わる活動として、サークル活動、地域交流活動等が挙げられている。

これらの構成要素に基づき、改修後の当館の状況について検討した結果、施設的には、ラーニング・コモンズとして必要な要件をほぼ満たしている一方、サービス面は十分ではなく、効果的に利用されるためには人的支援を充実させる必要があるとの認識で一致した。ただし、施設についても、改修後の利用動向からみてさらに改善の余地があるとして検討し、2011年度⁴⁾と2014年度⁵⁾にレイアウト変更を実施している。なお、「ラーニング・コモンズ」という名称は2011年度のレイアウト変更により初めて用いられたが、1階フロア全体を指す呼称であり、物理的な場所というより機能を示す概念的な呼称であった。2014年度のレイアウト変更により、「ラーニング・コモンズ」の室名をもつスペースを設置することができ、ようやく利用者にも「ラーニング・コモンズ」が場所として認知されることとなった。

表1 現在の施設概要

	コンセプト	主な施設	機能
1階	声をだしてもよいスペース	カフェテリア	飲食可能スペース(自動販売機のみ設置, 48席)
		玄関ホール	柱巻き書架, 新着雑誌, 多読コーナー等新しい情報を提供する場所
		マルチメディアコーナー	パソコン設置 (24台)
		ラーニング・コモンズ	可動式テーブル, ホワイトボード等設置 (71席)
		ピア・サポートルーム	学習相談 Study Support Spaceを実施
		グループ研究室	定員8名の部屋 (2室)
		視聴覚コーナー	視聴覚資料と視聴覚機器を設置 (4ブース)
		集密書庫	洋雑誌, 比較的利用の少ない図書を配架
2階	サイレントゾーン	閲覧室	自然科学系図書室 (1室), 社会科学系図書室 (1室)
		研究個室	社会科学系図書室内 (5室)
		学習コーナー	個人ブース (44席)
		雑誌書架	和雑誌を配架
3階	図書資料に限らない利用のためのスペース	閲覧室	人文科学系図書室 (1室)
		研究個室	人文科学系図書室内 (3室)
		マルチメディアコーナー	パソコン設置 (26台)
		雑誌書架	和雑誌を配架
		資料展示室 多目的ホール	展示ケースを備えた展示室 会議や講演会等に利用可能 (2室に分割可)

2.2 人的支援

現在、本館では、ラーニング・コモンズにおける人的支援として次の3つの学生サークルと協働し、それぞれのサークルをサポートする形で活動を展開している。

(1) ライブラリー・ワークショップ

(文化系サークル団体所属)

・発足の経緯

2010年11月に図書館内団体として発足

→2015年度 大学公認サークル化

・活動内容

読書推進活動を実施。Love Library Letter (LLL)

という手書き新聞の発行、読書会、ポップコンテストの開催等

(2) 阿波ビブリオバトルサポーター

(サポート系サークル団体所属)

・発足の経緯

2013年3月に徳島大学の学生・教職員を中心とした無償のボランティアグループとして発足

→2014年度 大学公認サークル化

・活動内容

全国大学ビブリオバトルの地区予選・決戦の主催、授業におけるビブリオバトル実施サポート等

(3) 学びサポート企画部

(サポート系サークル団体所属)

・発足の経緯

2013年3月に別の学生団体の一部門として発足

→2014年度 大学公認サークル化

・活動内容

学生の学習相談の場である「Study Support Space」

(以下 SSS と記載) の運営, 各種学習イベントを実施。活動理念として「大学生の日々の学習における躓きに対して, 学習支援を行うと共に, 学習をするために必要な基本知識・技能を習得する場や機会を創ることで, 大学生の学習スタイルの向上・改善を行う」を掲げる。

3. 人的支援提供に至る経緯

3.1 人的支援の必要性～ラーニング・コモンズを実質化するために

ラーニング・コモンズは, アクティブ・ラーニングへの転換や教育の質保証といった大学教育改革を支える施設として, 急速に設置が進められてきた。ラーニング・コモンズの定義や要件を述べたものはいくつかあるが,^{2) 3) 6) 7)} その多くで, ラーニング・コモンズにおける「人的支援」の必要性が述べられている。ラーニング・コモンズでは, 学生の能動的な学習やグループ学習を支えるための資料・設備, 学習サポート等の学習支援を, ワンストップで提供することが期待されているのである。

ラーニング・コモンズを新たに設置する場合, 人的支援も含めて制度設計し, 有償の学習アドバイザー等による支援を行っているケースもあるが, 当館の場合, 改修後の検討の中でその必要性が浮上したため, 人的支援を提供できる人的余裕も予算的余裕も無い状態であった。

しかし, このまま「施設があるだけ」という状態では, これまでの閲覧室と大差ないことになり, 有効に使われるとは思えない。ラーニング・コモンズ検討 WG での検討・調査でも, 施設はあるがあまり使われていない, という他大学の例が散見された。ラーニング・コモンズの要件を満たしたいということもさることながら, これを機に, 大学教育に資する施設として大学図書館を充分活用して欲しいという思いを強くし, 図書館外へ協力を求めることとなった。

3.2 教員への働きかけ～学生 FD チームとの協働～

まず協力を求めたのは, 学内の学習支援関連組織である。ラーニング・コモンズが実質的な効果をあげるためには, 学内の学習支援の文脈の中で活用される必要がある。そこで 2010 年, 学内で個別の学習相談を行う「学習支援室」を運営していた全学共通教育センター (2016 年度に教養教育院に改組) に対し, 連携を申し入れた。学習支援室のような学習相談を当館内でも実施できないかと打診したが不調に終わった。

次に協力を求めたのは教員である。当館の講習会

等を利用した教員に, 学習支援への協力が可能かどうかアンケートを実施すると共に, 個別に, 当館で学習支援等のボランティアを実施してくれる学生がいるかどうか尋ねてみた。その結果, 読書推進活動なら学生と共に活動できるという提案があり, 現在のライブラリー・ワークショップの前身が発足した。

当初はライブラリー・ワークショップで学習支援も行う枠組みを作っていたが, 実行が難しかったため, さらに別の組織との連携の可能性を探ることとなった。ここで連携対象として考えたのが, 大学の教育改革を担う FD 組織である。徳島大学では, 各学部 FD 委員会を代表する委員からなる FD 委員会を組織し, 総合教育センター教育改革推進部門を実務の中核として「全学 FD 推進プログラム」⁸⁾を実施している。「全学 FD 推進プログラム」では, FD 推進者の育成や授業改善のためのコンサルティングの他, 教職員を対象とした研修やセミナーが実施されており, それらのトピックとして, アクティブ・ラーニングも取り上げられている。ラーニング・コモンズの設置目的を考えても FD 組織との連携は最も自然で, お互いの活動にとって相乗的な効果をもたらすことが期待できる。

徳島大学では毎年, FD 活動の報告の場として「大学教育カンファレンス in 徳島」を開催しており, 誰でも参加可能となっている。そこで 2011 年度の「大学教育カンファレンス in 徳島」に初めて参加し, 共に活動できそうな教員, 団体を探すことを試みた。そこで偶然, 学習サポートとして「履修相談会」を実施する学生団体「Ways!」が報告⁹⁾をしていたため即座にコンタクトをとり, その団体のサポートをしている指導教員にも接触することができた。

徳島大学の FD は次のとおり定義を定めており¹⁰⁾, 学生と共に活動するという特徴をもつ。

「徳島大学における FD とは, 「本学の教育理念・教育目標を実現するための取組みであり, 教職協働の下に学生の参画を得て, 組織的な教育改善・改革を推進し, その妥当性・有効性を不断に検証することにより更なる改善を図る活動」と定義される。」

(下線筆者)

学生団体「Ways!」は, 徳島大学の FD 委員会の下部組織的存在であり, この指導教員は, 他のいくつかの学生団体のサポートも行っていた。この指導教員も学内での教育改善を進めたいとの思いがあり, また, 学生時代に他大学図書館で学習支援活動の経験もあったことから, 当館との連携について積極的な姿勢を示した。しかし, 学生団体として学習支援にどこまで踏み込めるかは不明であり, 当館としても学生協働を始めるのに十分な体制ではなかったた

め、まずは筆者が個人的にこれら学生団体の活動にサポート職員として参加することとなった。

これら学生団体は、学生生活全般のピア・サポートを目的とした学生FDグループとして活動しており、2012年～2013年にかけて、組織名称や枠組みを変えながら発展した。2013年1月には、学生FDグループ「繋ぎ create」の発案で、当館を利用した学習支援企画として「スタディレスキューWeeeek」を実施した。これは、後期試験前の一週間、本館のグループ学習スペースで複数のボランティア教員が待機し、学生の学習相談に応じる企画で、学生による学習支援として地元NHKにも取り上げられる等話題となった。この企画が、現在のSSSの萌芽となり、2013年4月から、繋ぎ createの一部門である「SSS企画チーム」の運営によるSSSが発足することとなった。

なお、阿波ビブリオバトルサポーターは、2012年に行った授業でのビブリオバトル実施を契機として、徳島でのビブリオバトル普及を目指し、2013年に教職員と学生とで結成したものである。

3.3 有志の活動から図書館業務への組み込み～SSS企画チームから学びサポート企画部へ～

2013年10月、当館は「図書館の改革の方針」をまとめ、今後の方向性として「教育支援に軸足を置いた図書館へ転換する」ことを示した。

この方針は、徳島大学の現状や文部科学省の大学改革実行プラン¹¹⁾、中央教育審議会答申等国立大学に求められている大学改革を踏まえ、徳島大学附属図書館としてどのような改革が必要かを検討し、まとめたものである。2013年4月、学内に「図書館の今日的課題に関する検討会」が設置され、同年10月にかけて、他大学調査や利用者アンケート等により検討した結果、今後の徳島大学附属図書館には「教育への積極的な関与と今まで以上の学修支援サービスの提供が必要である」との結論に至ったのである。

当時、すでに開設していたSSSは、この方針において、「徳島大学の教育・学修支援に資するもの」として認められ、図書館の事業として体系化・実質化することとなった。実質化にあたっては、2013年8月21日付で文部科学省が公表した「学修環境充実のための学術情報基盤の整備について(審議まとめ)」¹²⁾を参考にすべきとされた。また、大学改革実行プラン以後の動きを踏まえて2013年7月に制定された「徳島大学機能強化プラン」¹³⁾においても、「図書館機能の強化」としてピアサポーター制度の構築が提言されていた。いずれも、学生同士が支援し合う「ピアチュータリング」を促進することを求めたもので

ある。当時、SSSでは教員だけでなく学生も学習サポートを行っていたが、ボランティアに頼っていたため、ピア・サポート体制の安定化を目的に、これらの学生を図書館におけるTAとして雇用できるかどうか検討を行うこととなった。検討の結果、学内の制度的にTA雇用はできなかったが、徳島大学附属図書館として独自に学生アドバイザーを設置することが決定した。これにより2014年4月付で「徳島大学附属図書館学習支援アドバイザー実施要領」が制定され、学長裁量経費による事業として学習支援アドバイザーを設置することとなった。こうして、SSSは、当館が学習支援アドバイザーを公募して、「SSS企画チーム」と協働で運営する体制となった。

一方、「図書館の改革の方針」では、SSS以外の学生協働についても言及している。この方針で掲げられた「図書館の理念・目標」¹⁴⁾は、利用者へのメッセージと共に、図書館ホームページに掲載されており、そのメッセージの中で、SSSや他の学生協働活動については次のように書かれている。

「学生の皆さんの主体的な学習のサポートに力点を置くこととしましたので、(中略)スタディ・サポート・スペース(SSS:出前オフィスアワー)等を積極的に利用してください」

「図書館では、学生さんとの協働事業としてSSSの外にもビブリオバトル、(中略)等学生さんが企画、実施したり参加するイベントを積極的に実施し、これらの行事に参画することで社会人に必要な企画・実行力、コミュニケーション力等の涵養に資することにしています。」

このように、当館では、SSSを含めた学生協働による活動について、利用者へのサポートの増強を企図すると共に、学生協働で活動する学生自身の主体的な活動によるスキルアップに価値を置き、図書館としてサポートしていくことを表明した。

ただし、2013年当時の3つの学生団体は、組織的には非常に不安定なものであった。ライブラリー・ワークショップは図書館独自の設置、阿波ビブリオバトルサポーターは学生を中心とした有志の団体、SSSを運営する「SSS企画チーム」は繋ぎ createの一部門であり、いずれも設置母体がわかりにくく、また、活動状況も他の学生には伝わりにくい状況であった。

しかし、2014年、徳島大学ではこれまで自主的に活動してきたピア・サポート団体を公認サークルとして認め、「サポート系サークル団体」¹⁵⁾を組織することとなった。サポート系サークル団体は「学生の自主性を尊重したピア・サポート活動、ボランティア活動を支援することにより、学生の学びの質を

向上させ、教育プログラムを遂行するための主体的な活動を継続的に促進することを目的」として結成され、体育系サークル、文化系サークルに次ぐ、第三のサークル団体として位置づけられた。結成にあたっては、該当の活動を行っている学生団体に所属の意思の確認があり、図書館で活動する3つの団体にも声がかかった。その結果、「SSS 企画チーム」は「学びサポート企画部」として繋ぎ create から独立・再編成し、阿波ビブリオバトルサポーターと共に「サポート系サークル団体」に所属して活動することを決定した。一方、ライブラリー・ワークショップは、活動内容がサポート系サークルにはなじまないとして所属を見合わせ、一年間の同好会活動を経て、大学の文化系サークルとして活動することを選んだ。

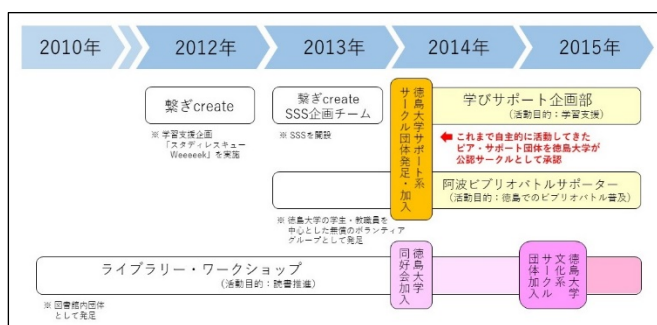


図1 学生団体の変遷

大学公認サークル化は2つの効果をもたらした。一つは学生への効果である。他のサークルと同様の位置づけであることから理解されやすくなり、また、サークルとして公式の新歓行事の開催等が可能となったため、新入部員獲得の機会が多くなった。また学生サークルとしての自覚から、学生自身でサークルの組織運営を行うようになった。

もう一つは、図書館の協力体制整備への効果である。大学公認サークルとなったことで各学生サークルが大学に提出する「学生団体名簿」に、図書館職員を「アドバイザー」として登録することができるようになり、職員としてサークルを支援することが制度的に明確になった。その後、2016年にラーニング・コモンズ検討WGが解散したことに伴い、学生サークルの支援は係の所掌業務に落とし込まれ、図書館業務の中に位置づけられて現在に至っている。

このように、当初は有志の活動から始めたSSSであるが、当館の改革の時期というタイミングもあり、SSSは当館の「人的支援」として正式に取り組めることとなった。この成功の要因は、図書館だけで解決を試みるのではなく、図書館の外へ出て学内の関

係組織との連携を図ったこと、「お試し」のような形でどのような活動になるのか具体的に示したこと、さらには、それらの活動の成果として、SSS初年度の相談者数が300人を越え、12人のアドバイザー教員の協力が得られたこと等、当館職員や大学執行部等にも納得してもらえる実績とニーズを示したことにあると考えている。

4. 学生協働で行う学習支援について

4.1 学びサポート企画部によるSSSとは

まず、当館の学生協働のあり方について整理したい。学生協働は「図書館業務の一端を、職員とともに、利用者でもある学生が担う活動」と定義されるが、その中には様々な形態がある¹⁶⁾。八木澤による活動内容別の4つの分類（図書館サポート、学生選書、学習支援、学生サークル・その他）が知られているが、その他、「組織形成」「報酬の有無」という2つの観点からも分類が可能であろう。

表2 学生協働の分類

観点	分類	説明
組織形成	大学図書館主導型	図書館がサポーター制度等を制定して募集する活動
	大学図書館非主導型	学生の任意団体、サークル、その他の企画による活動
報酬の有無	有償	アルバイト、TA、アドバイザー雇用等
	無償	ボランティア、サークル活動等
	その他	授業単位の取得、ポイント制度等

当館の学生協働は、どのサークルも「大学図書館非主導型」「無償」に分類され、学生の自主的な活動を当館がサポートしている形をとっている。SSSについても、学習支援アドバイザーは有償であるが、運営部分は無償の学生サークルが担っている（詳しくは後述）。SSSは当館が最も必要としていた「学習相談」を行う人的支援である。それが、学生協働の中で教員・学生と図書館職員が同じ志をもつことで自発的に生まれ、現在も学生主体で運営できるところが当館の活動の特徴と言える。以下、SSSの活動内容及び効果について詳述する。

SSSは、学生の学習に関する相談に対してアドバイザーが対応する取り組みで、2013年4月から始まった。アドバイザーは本学の教職員、大学院生が担っており、SSSの時間割（図2参照）に合わせて本館1階のピア・サポートルームに待機し、訪れた学生の学習相談に対応する。SSSを開設して以降、授業期の平日は毎日実施している。

SSS学習支援内容・アドバイザー
2017年10月4日現在

時間帯	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
15:00 ↓ 16:00	資料情報科の使い方レポート 図書館職員 さん	数学・電気電子 仲尾 直樹 さん	様形代数・幾何の仕方 吉田 博 先生	数学・電気電子 仲尾 直樹 さん	文系レポート添削・読書相談 星野 凜 さん
16:00 ↓ 17:00	化学実験レポート 井上 紀正 さん	レポートの書き方・リテラシー 井戸 慶治 先生	化学実験レポート 井上 紀正 さん	文系レポート添削・読書相談 星野 凜 さん	
17:00 ↓ 18:00	物理学 斎藤 隆仁 先生	物理学・その他 小山 晋之 先生	留学相談・韓国語 小林 冬馬 さん	レポートの書き方・化学 南川 慶二 先生	数学 大沼 正樹 先生
18:00 ↓ 19:00	数学 大淵 朗 先生	レポートの書き方・化学・物理学 古屋 玲 先生	化学・環境生物・宇宙相談 佐藤 高剛 先生	レポートの書き方・生物学 渡部 稔 先生	レポートの書き方・リテラシー 上田 勇仁 先生

授業の内容が難しい? そんなあなたのためのSSS
★上記の時間帯とは一部異なる場合があります。SSSを利用する場合は、以下のいずれかの方法で最新の情報をご確認ください。
①学びサポートルーム前の時刻表示板、②徳島大学附属図書館ホームページ

気軽に質問に来てくださいね!!
Study Support Space 学びサポート企画部

図2 SSSの時間割(2017年度後期)

学びサポート企画部には、2018年10月現在12名の学生が所属しており、SSSの企画・運営を行っている。主な活動は、教員アドバイザーの選定・開設期間中の連絡調整・掲示物等作成・活動報告等であり、具体的な活動内容は以下のとおりである。

SSSの教員アドバイザーは学びサポート企画部の学生が授業を受けていて親しみやすい、優しいと感じた教員及び、FD関連の教員に依頼している。協力の依頼は学びサポート企画部が行っており、ボランティアとしての無償協力でありながら、教員には快く協力頂いている。

SSSの時間割も教員アドバイザーの空き時間等を確認しながら、学びサポート企画部が作成しており、その他の連絡もほぼ全て学生が行っている。アドバイザーはSSSを担当した際、毎回「SSSアドバイザー相談記録シート」(図3参照)に相談者の学年、所属、人数、相談内容、感想や要望といったコメントを記入することになっており、学びサポート企画部がデータを集計・管理している。このシートの特徴的な点として、教員からのコメントに対し、学びサポート企画部の学生が返事コメントを返すことが挙げられる。教員のコメントにはSSS運営に関する意見・要望だけでなく、教員の近況や学生へのメッセージ等、その教員の人柄がよくわかるものも含まれており、教員とSSSを運営している学生との交換ノートのような様相を呈していることもある。このようにコメントを双方向にやりとりすることで、学生は教員に親しみを感じ、教員も運営する学生のことを知る機会を得て、互いにその距離が縮まる効果がある。これにより、友好的な関係での継続的なSSS運営が可能となっているのである。実際に教員アドバイザーの半数以上はSSSを開設した2013年度から継続して協力頂いている。無償にも関わらず、このように教員が継続的に協力してくれるのは学生が運営に関わっていることが要因の一つであると考え

られる。

SSSアドバイザー相談記録シート
日時: (6月5日(月) 17:00 ~ 18:00)
アドバイザー: (斎藤隆仁)

No	学部・学科・学年	内容
1	理学部 相談者数 2名	物理の質問
2	理工学部 相談者数 1名	レポートの書き方
3	相談者数 名	
4	相談者数 名	
5	相談者数 名	

○SSS運営チームへのメッセージ
今日熱心に(理解できなかったところを)質問してくれました。

○その他
お名前 斎藤隆仁 さんへメッセージ
お疲れ様です。本当に熱心な運営をしてくださってありがとうございます。

図3 SSSアドバイザー相談記録シート

その他、学びサポート企画部はミーティングを週1~2回実施し、SSSの利用状況を共有すると共に、アドバイザーから寄せられたコメントへの対応や改善点の検討を行い、円滑な運営に努めている。

SSSの2017年度の実施日数は150日、相談者数は392名である(図4参照)。主に初年次学生の理系科目に関する相談が多く、徳島大学生の理系基礎科目における不明点を解消する場として機能していると推察できる。

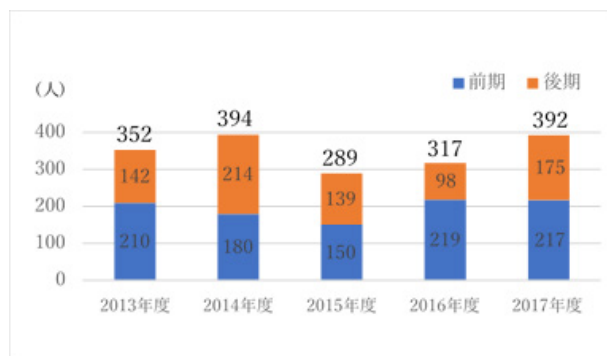


図4 SSS相談者数の推移

4.2 SSS に関するアンケートの実施

SSS を開設してから3年が経過した2016年度に、SSS の効果を図るため様々なアンケートを実施した。(1)図書館利用者へのアンケート¹⁷⁾、(2)SSS 利用者へのアンケート¹⁸⁾、(3)アドバイザーへのアンケート¹⁸⁾の3種類である。

(1) 図書館利用者へのアンケート

当館では、約3年ごとに、図書館利用者を対象として、図書館サービス全体に関するアンケートを実施している。2016年7月に実施したアンケートでは、学習支援の項目においてSSSの認知度・利用率に関する設問を設け、302名から回答を得た。SSSの認知度は約63%で、3年前に実施した前回のアンケート調査結果と比較すると、変化はあまり見られなかったが、利用率は少し上昇していた。しかし、約4割の学生にSSSは認知されておらず、引き続き今後も一層の周知・利用促進活動が必要である。

(2) SSS 利用者へのアンケート

2016年度前期の相談期間中に、SSSを利用した学生に対し、アンケート調査を実施した。調査方法は学習相談終了後、アドバイザーがアンケート用紙を配布し、ピア・サポートルームの外に設置してある回収BOXへ任意に入れてもらう形式とした。このため回答数はわずか22名となったが、「SSSを利用して満足しましたか(4件法)」という設問に対し、全員から「満足」または「やや満足」の回答を得た。その理由を記述式で尋ねた結果、学習内容の理解が進んだという理由が8件、丁寧・親切であるという理由が8件あった。その他、このような場があることが安心につながる、アドバイザーとの会話をする事で、考えが深まったという意見もあった。

本田[ほか]¹⁸⁾はSSS利用者へのアンケートについて、次のように考察している。

以上の結果からSSSは、学生の学習に関する相談に対応し、学習内容の理解や定着を図るだけでなく、学習で困った時に利用できる環境が整っているということ自体が、学生に対し、ある種の安心感を与えていると言える。また、このように教職員や大学院生と身近に接する機会が設けられていることで、学生の学習意欲の向上や能動的学習への転換、視野の広がりなどに影響を与えていることが伺える。

(3) アドバイザーへのアンケート

2016年8月に大学院生アドバイザー3名、2016年10月に教職員アドバイザー12名を対象に、SSSの意義に関するアンケート調査を実施し、15名全員から回答を得た。実施結果の一部を以下に示す。

表3 SSSのアドバイザーを担当することで得られたこと・もたらされた変化(記述式)¹⁸⁾

内容	記述数
学生の学習の様子・理解の状況・学生生活等が分かった	11
自身の授業・学習へのフィードバックが得られた	5
他の教員の授業の様子・課題・方針等が分かった	3

表4 SSSは大学図書館や徳島大学生にどのような影響をもたらしているか(記述式)¹⁸⁾

内容	記述数
学生が安心して学習に関する理解を促進し、疑問や躓きを解消することができる	6
学生が大学教員・大学図書館を身近感じることができるようになる	6
学生の学習の質向上・大学教育のパラダイム転換に貢献	2

本田[ほか]¹⁸⁾はアドバイザーへのアンケートについて、次のように考察している。

以上の結果からアドバイザーは、SSSで学生の相談に対応することで、授業内容の理解度や考え方、悩み、どこで躓くのか等を把握することができるようである。また、様々な学部の学生が訪れるため、他学部や他の教員の授業課題等を知ることにも可能になっている。これらは教員アドバイザーにとって自身の授業へのフィードバックに役立つものであり、SSSでの対応はアドバイザーにとっても利点があることが伺える。また、大学院生アドバイザーは後輩に教えることで、知見が広がったり、思考の整理に繋がったりと、自身の学習理解にも影響を受けるとともに、やりがいも感じていることが分かった。

(中略)SSSは利用している学生だけでなく、相談に対応するアドバイザーにも影響を与えており、その結果、教員の授業の質や学生の学習の質向上の一助となっていると言える。SSSは学生の学習相談に対応する取り組みであるが、

大学における教授，学習の幅広い面に対して，影響を与えている。大学における教育の在り方，学生の学習の在り方が問われ，教育改革の重要性が指摘される今日において，SSS のように学生の学習を支える取り組みは重要であると考えられる。

以上のアンケートの結果から SSS は，認知度に課題はあるものの，相談者，アドバイザー双方の学習・教育の質の向上に効果をもたらしていると言える。

4.3 学びサポート企画部による学習関連イベント

学びサポート企画部は活動理念に基づき，SSS の運営だけでなく，大学での学習・研究に対する動機づけを目的とした以下のような学習関連イベントも随時開催している。講師・プレゼンターとなる教員・学生の選定や協力依頼は学びサポート企画部の学生が行っているため，より学生のニーズに沿った内容・人選でのイベントが可能となっている。また，学生が多く集まる大学図書館内でこのような学習関連イベントを開催することで，周囲の学生への周知効果・興味喚起も期待でき，間接的な学習支援となっている。

・ レポートの書き方講座

本学教員が講師を務める新生を対象としたレポートの書き方講座で，4 月末頃に開催。内容はレポート作成における基本事項や論理的なレポートの作成技術等。2014 年度に「読書レポート」という新生向け講義課題への対策として，教員の協力のもと実施したのが始まり（参加者は 34 名）。2016 年度以降，当館が新生オリエンテーションという最適な時期に告知し始めたことで，より多くの学生が参加するようになった。授業では対応しきれない学習支援として教員からも認知されるようになり，会場や実施回数，協力教員数等，年々規模を拡大して実施。2018 年度は正課外の企画にも関わらず 291 名の学生が受講した。

2017 年度からは少人数参加型のレポートの書き方講座も実施し，実際にレポートを書きながら，より実践的な指導を受けることができる機会も用意している。

・ 先生のコバナシ

～実は私こんなことをしているんです～

本学教員に日々行っている研究の内容，興味深い点，取り組む姿勢，熱い思い等を発表して頂く企画。学生が研究に対して関心をもつきっかけをつくることを目的に開催。2014 年度から不定期に開催してお

り，今までに 18 名の教員が発表を行った。

・ 学生のコバナシ

～実は私こんなことをしているんです～

先生のコバナシの学生バージョン。活発に活動している学生に，自身の活動内容や経験について発表してもらう企画。他の学生の活動を知り，大学での学びに対する動機づけや意識の向上を目的に開催。2016 年 5 月に開催し，3 名の学生が発表を行った。

・ 留学関連イベント

留学経験者に留学先の話や留学で学んだこと，費用，きっかけ，必要な語学力等，留学に関する様々な内容について発表してもらう企画。留学について知る機会・場を提供することを目的に 2015 年度から不定期に開催。加えて，2017 年度は外国人とのコミュニケーションに対する抵抗感を減らすことを目的に，留学生と留学経験者，留学未経験の学生で少人数グループを作り，「絵しりとり」ゲームや自由なディスカッションを行う企画も実施した。

・ 卒論関連イベント

学部の 4 年生に自身の卒論について発表してもらう企画。下級生の研究に対する関心を高めることを目的に 2016 年度から不定期に開催。加えて，2017 年度は研究内容だけでなく，卒論への取り組み方やスケジュール，実体験等について発表してもらう機会も設けた。



図 5 イベントの様子

(左：先生のコバナシ，右：留学関連イベント)

4.4 学びサポート企画部による成果発表

学びサポート企画部は SSS の実績や実施した学習関連イベントについて，様々な場所で成果発表を行っている。大学図書館学生協働交流シンポジウムでのポスター発表や口頭発表，当館のメールマガジン「すだち」への記事作成，「大学教育カンファレンス in 徳島」での口頭発表等である。特に「大学教育カンファレンス in 徳島」は SPOD（四国地区大学教職員能力開発ネットワーク）の研修プログラムの一環でもあり，大学内外の教職員が参加するため，発表

する学生にとってはたいへん貴重な機会となっている。抄録及び発表用スライドの作成、発表練習等を通して学生は著しい成長をみせる。それは文章力やスライド作成・発表の技術だけでなく、積極性や行動力といった要素にもみられる。学生への指導は教員と図書館職員が共同で担っており、困難な点も多いが、成果も大きい。このように成果発表はその準備過程等を含め、協働を行う学生へのキャリア形成支援にもなっているのである。

5. 考察

5.1 学生サークルと協働する意義

大学図書館で実施する学習支援を、学生と協働で行う最大の意義は、サービス対象者の目線で支援が行えることだと考えられる。例えば教員の選定も、学生が行うことによって、学生にとってより相談しやすい教員を選ぶことが可能となっている。不定期に行っているイベントも、当事者である学生が「知りたい」「やってみたい」ということを実施しており、職員では思いつかないような企画が生まれている。それは、当館だけでは成し得なかった支援である。また、図書館職員にとっては、学生と共に活動することで、学生の行動パターンやニーズを「情報」としてではなく「体感」として理解することができ、業務改善の一助となっている。

さらに、大学図書館に学生が関わっていることで、学生同士の間で大学図書館の情報を見聞きする機会が増え、学生にとって大学図書館が身近な存在として浸透しつつある。特に、当館独自の団体ではなく、大学のサークルであることの利点大きい。サークル同士の横のつながりから、当館でのイベントの際は他のサークルからのサポートがあり、参加者層も以前より広がっている。このように、大学図書館で実施している活動を身近に感じられることで、大学図書館から発信する情報に対する感度があがり、当館独自で活動するよりも、より多くの学生に図書館の活動が見えてくるのではないだろうか。

5.2 これまでの活動で築いてきたもの

「国立大学図書館協会ビジョン2020」（以下ビジョンと記載）¹⁹⁾では、3つの重点領域「知の共有」「知の創出」「新しい人材」が挙げられている。学生協働による図書館活動は、これらの重点領域のうち「知の創出」「新しい人材」で掲げられている目標に極めて近い成果をもたらしている。大学図書館で様々な企画・イベントを実施することは、所属や立場を超えたコミュニケーションの場の提供となっており、学部横断的な興味関心を引き起こすきつ

けとなるだろう。実際に、サポート系サークルではないサークルや学生の自主的な活動団体も、当館でミーティングを行ったり、勉強会やイベントを行ったりするようになっており、大学図書館が学生の自主的な「活動の場」となっていることがうかがえる。このような活動をきっかけとして新しいコミュニティを作ったり、刺激を受けて新しいことに挑戦したりする学生も出てきており、これこそがビジョンで掲げられている「知を創出する場の拡大・整備・提供」の一つの形なのではないかと考えている。また、学生協働を通じた学生や教員、他部局との繋がり、新たな人材の参画として、図書館活動、大学教育双方に影響を与えている。図書館単独では実施が難しい、学生のニーズや感覚、人脈を生かしたイベントの実施（先生のコバナシや留学関連イベント等）は新しい知の創出に資することも可能となる。このように、これまでの活動は、図らずもビジョンをささやかながら具現化していると言える。

6. 課題

このように、多くのメリットをもたらす学生協働であるが、同時に多くの課題も抱えている。それは、以下のとおり「学生」に起因するもの、「図書館組織」に起因するものに大別される。

(1) 学生に起因する課題

学生協働は、学生アルバイトとは異なり、学生が主体的に関与することで、自身のキャリア支援や学習支援にもなることが目的でもあるが、どこまで主体性に任せていいのか、業務としての完成度を取るか、学生の成長を見守るか、判断に迷うことが多い。関わる学生が増えるほど、学生に合わせた指導が必要となり、図書館職員としての職能を超える部分もある。また、学生との連絡調整等もスムーズでないことが多く、職員の負担となる。また、一方で、これまでの活動を維持するためには継続的な学生の参加が必要であり、どうやって学生を確保するか、有効な広報方法を常に模索している状況である。

(2) 図書館組織に起因する課題

大学図書館で学生協働による学習支援を実施することには必然性があるのか、ということについては、依然、当館の中で意識が共有されているとは言い難い。大学図書館で実施することに意義がある、という明確な評価があればよいが、何を以てどのように評価するのか、評価基準もない状況では判断が難しく、そもそもすぐに成果が出るとは限らないものであるため、管理職の意向等によって学習支援方針が変わる可能

性がある。そのような状況では、「学習支援や学生協働に適した人材」が常に配置されるとは限らず、さらに、当館の事情として図書館の専任職員が新規採用されていない、ということもあり、人材育成もままならない。結果、学生協働にまつわる業務は属人的な仕事となり、組織としての仕事として評価されにくいいため、適した人材の必要性を訴えられないという悪循環に陥る可能性がある。こういった状況では、当然、活動のための財源確保も難しい。

7. まとめ

大学図書館にラーニング・コモンズがある意義は、①学習のための資料が存在すること、②もともと、大学図書館が学生にとって「学習する場」と認知されており、他の場所を使うよりも敷居が低いこと、という学生にとっての利便性の高さにある。上述したような課題を解決することができず、最終的に当館で学習相談を行うことが難しくなったとしても、別の部署が実施を担当しつつ、場所は当館で実施する等、学生の利便性や行動パターンを勘案して支援できるよう各部署の間で連携をとれることが望ましい。これまでの学生協働・学習支援活動の中で、教員や学習支援系の部署との交流も増えたので、今後も緩やかな連携を保っていきたい。

なお、学習支援の形は様々ある。大学図書館が従来行ってきた資料提供も、本質的なアクティブ・ラーニング（学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修）²⁰を行うためには増強が必要であり、ICTやe-learningとの関係、電子書籍の動向も含め、改めて見直すべき支援である。一方で、「大学図書館」という場がもつ強みも忘れてはならない。今日の大学教育の変化として挙げられている「知識の伝達から知識の定着・活用へ」²¹とはつまり、専門家による（講義等での）一方的な知識の伝達ではなく、コミュニティの力を使いながら、様々な問題に対する知識を創出することを指す。大学図書館は多様なグループや個人が自由に集えるスペースであり、そういったコミュニティが生まれ、活動する場となりうる²¹のである。こういった自組織の強みをもって、他部署と連携をとることが、結果的に、よりよい学習支援に繋がっていくだろう。

ラーニング・コモンズでの人的支援の充実を考えることは、とりもなおさず、大学図書館の大学教育に果たす役割を改めて考え直すことであった。大学教育が変化している今、どのような施設として存在することが必要なのか、その答えの一つが、「大学教育の文脈の中にきちんと存在すること」である。

すなわち、学生のニーズを捉えつつ、大学がどのような学生を育てようとしているのかを知り、それらの実現に向けてできるところから連携していくことであろう。ともすれば、大学図書館の学習支援は学生にとっては「オプション」と捉えられがちである。しかし、サポートを受けてみれば必要なものだったことが分かるケースも多い。これらの学習支援が有効活用されるためには、きっかけとして、サポートを受けざるを得ない状況をつくるのが有効であり、いかにうまく大学の講義と連携するかが重要になってくる。現在の活動の中では、学びサポート企画部が実施する「レポートの書き方講座」はそういった連携の実現例と言ってよい。このような事例を積み重ねて当館の存在価値を高め、徳島大学の学習支援戦略には当館が「必須の存在」となるような、学習支援体制を構築していきたい。

注・引用文献

- 1) 文部科学省. “学術情報基盤実態調査／平成29年度／大学図書館編”. 文部科学省ウェブサイト. <https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&tstat=000001015878&cycle=0&tclass1=000001113547&tclass2=000001113548&second2=1>, (参照 2018-08-01).
- 2) 国立大学図書館協会教育学習支援検討特別委員会. “ラーニング・コモンズの在り方に関する提言：実践事例普遍化小委員会報告”. 国立大学図書館協会ウェブサイト. <https://www.janul.jp/j/projects/sftl/sftl201503a.pdf>, (参照 2018-08-01).
- 3) 米澤誠. ラーニング・コモンズの本質--ICT時代における情報リテラシー/オープン教育を実現する基盤施設としての図書館 (特集 ラーニング・コモンズ). 名古屋大学附属図書館研究年報. 2008, 7, 35-45.
- 4) 徳島大学附属図書館. “徳島大学附属図書館本館1階が「ラーニング・コモンズ」に生まれ変わりました!”. 徳島大学附属図書館メールマガジン「すだち」No.84. 2012-01-20, <http://www.lib.tokushima-u.ac.jp/m-mag/back/084/index.html>, (参照 2018-08-01).
- 5) 徳島大学附属図書館. “徳島大学附属図書館1階ラーニング・コモンズが変わりました[本館]”. 徳島大学附属図書館ウェブサイト. 2015-01-06, <http://www.lib.tokushima-u.ac.jp/news/news14/2015010602.html>, (参照 2018-08-01).
- 6) 科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境

- 基盤部会 学術情報基盤作業部会. “大学図書館の整備について(審議のまとめ)ー変革する大学にあって求められる大学図書館像ー”. 文部科学省ウェブサイト.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1301602.htm, (参照 2018-08-01).
- 7) 長澤多代. 主体的な学びを支える大学図書館の学修・教育支援機能-ラーニングコモンズと情報リテラシー教育を中心に-. 京都大学高等教育研究. 2013, 19, 99-110.
- 8) 徳島大学. “FD 推進プログラムの実施計画”. 徳島大学ウェブサイト.
<http://www.tokushima-u.ac.jp/cue/fd/categories/project/>, (参照 2018-11-18).
- 9) 野勢祐樹 [ほか]. 学生による履修相談の取り組みの成果と課題-行列のできる履修相談じよ及び抽選漏れのための履修相談じよの実施から-. 平成 23 年度全学 FD 推進プログラム大学教育カンファレンス in 徳島 発表抄録集. 2012, 42-43.
<http://www.tokushima-u.ac.jp/cue/fd/docs/2015110400167/files/42-43.pdf>, (参照 2018-08-01).
- 10) 徳島大学. “全学 FD の組織”. 徳島大学ウェブサイト.
<http://www.tokushima-u.ac.jp/cue/fd/organization/>, (参照 2018-11-18).
- 11) 文部科学省. “大学改革実行プラン～社会の変革のエンジンとなる大学づくり～”. 文部科学省ウェブサイト.
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/06/_icsFiles/fieldfile/2012/06/05/1312798_01_3.pdf, (参照 2018-10-03).
- 12) 文部科学省. “学修環境充実のための学術情報基盤の整備について(審議まとめ)”. 文部科学省ウェブサイト.
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/08/1338778.htm, (参照 2018-10-03).
- 13) 徳島大学. “徳島大学機能強化プラン～国立大学改革基本的考え方に基づいて”. 徳島大学ウェブサイト.
http://www.tokushima-u.ac.jp/_files/00166379/kinoukyoukaplan2507.pdf, (参照 2018-10-03).
- 14) 徳島大学附属図書館. “徳島大学附属図書館の理念・目標と評価指標”. 徳島大学附属図書館ウェブサイト.
<https://www.lib.tokushima-u.ac.jp/pub/philosophy-and-goals/201404.pdf>, (参照 2018-10-03).
- 15) 徳島大学. “サポート系サークル団体連合会”. 徳島大学ウェブサイト.
<http://www.tokushima-u.ac.jp/cue/sca/>, (参照 2018-11-18).
- 16) 八木澤ちひろ. 大学図書館における学生協働について: 学生協働まっぷの事例から. カレントアウェアネス. 2013, 316, 10-14.
<http://current.ndl.go.jp/ca1795>, (参照 2018-08-01).
- 17) 徳島大学附属図書館. “平成 28 年度附属図書館(本館)利用者アンケート実施報告”. 徳島大学附属図書館ウェブサイト.
http://www.lib.tokushima-u.ac.jp/guide/qanda/pdf/enquete201607_m.pdf, (参照 2018-08-01).
- 18) 本田剛士 [ほか]. 徳島大学の教育・学生の学びに与える Study Support Space のインパクト. 平成 28 年度全学 FD 推進プログラム大学教育カンファレンス in 徳島 発表抄録集. 2016, 10-11.
<http://www.tokushima-u.ac.jp/cue/fd/docs/2016112200021/files/A1.pdf>, (参照 2018-08-01).
- 19) 国立大学図書館協会. “国立大学図書館機能の強化と革新に向けて～国立大学図書館協会ビジョン 2020～”. 国立大学図書館協会ウェブサイト.
https://www.janul.jp/sites/default/files/2018-05/janul-2020vision_pamphlet_non-spread.pdf, (参照 2018-08-01).
- 20) 中央教育審議会. “新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け, 主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)”. 文部科学省ウェブサイト.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo00/toushin/1325047.htm, (参照 2018-08-01).
- 21) 米澤誠. ラーニングコモンズ再考: アクティブラーニング支援から学びのコミュニティ支援へ. 東北大学附属図書館調査研究室年報. 2017, 4, 131-133. <http://hdl.handle.net/10097/00104424>, (参照 2018-08-01).

<2018.11.29 受理>

- 1 ささき なみえ 徳島大学附属図書館図書情報課総務係
- 2 かめおか ゆか 徳島大学附属図書館図書情報課利用支援係